

氏 名	新 陸 人 あたらし むつ んど
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 126 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	都 市 地 域 社 会 シ ス テ ム の 理 論 的 ・ 実 証 的 基 礎 研 究

(主 査)
論文調査委員 教授 池田義祐 教授 水津一朗 教授 柿崎祐一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、すべて17分冊、3600頁をこえる龐大なものである。著者が本論文で意図しているところは、従来一般に経験社会学の一分野として実証的研究が中心をなしている都市社会学を理論社会学の立場から根本的に再構成し、都市社会学の理論的基礎研究を試み、究極的には社会学における理論と実証の統合という現代社会学の当面している難問題を解決する方途を探究せんとしたものである。その構成は次の五部からなっている。すなわち、第Ⅰ部 社会システムの分析モデル（第一章 社会システム分析の基本構造、第二章 社会システムとモデル構成の論理）、第Ⅱ部 社会学説における都市の世界像（第一章 歴史的典型としての都市——M. ウェーバーの都市類型論、第二章 社会的連帯の成立基盤——É. デュルケイムの有機的連帯論、第三章 社会的連帯と規範原理——É. デュルケイムの集合意識論、第四章 競争的共存空間としての都市——R. パークと人間生態学）、第Ⅲ部 都市地域システムの分析モデル（第一章 地域社会システムの基礎分析、第二章 地域社会システムと環境分析、第三章 都市地域社会システムの分析）、第Ⅳ部 都市地域調査の関連データ（第一章 生活意識と生活構造の実証研究、第二章 都市意識と地域意識の実証研究、第三章 都市コミュニティの実証研究、第四章 奈良県の都市化実態調査、第五章 関連項目の二次データ）、第Ⅴ部 都市地域社会調査の事例報告（第一章 調査地の概観、第二章 単純集計結果の考察、第三章 地点別集計結果の考察、第四章 相関分析と因子分析）である。

以上五部のうち、前三部は都市地域システムの理論的基礎研究にあたり、後の二部は同じく実証的基礎研究にあたるが、それぞれの主要なる部分となっているのは、前者では第Ⅲ部都市地域システムの分析モデルであり、後者では第Ⅴ部 都市地域社会の事例報告である。第Ⅰ部と第Ⅱ部は都市地域システムについての基礎理論を展開するにあたって、そのための理論的前提としての社会システム論（著者は T. Parsons の社会システム論を批判的に継承している）と、社会学における著名な都市論についての広汎な検討にあてられている。これらは第Ⅲ部の都市地域社会の分析モデルを導き出すために必要な予備的作業である。又第Ⅳ部では、著者自らが行った二地方都市（奈良市と生駒市）についての事例研究方法による実態調査を中心とする第Ⅴ部の実証的基礎研究にとって重要な前段階的意味を有する既存の百種類以上に

のぼる多数の関連データの厳密周到なる考察がなされており、これ又著者自らの都市地域社会の実施に必要な予備的作業というべきであろう。

本論文の主要部分にあたる第Ⅲ部 都市地域社会の分析モデルにおいて、著者は第Ⅰ部で考察した T. Parsons の「4機能 (A. G. I. L.) パラダイム」のうち、特にⅠ位相を中心としつつ、都市地域社会システムを経験的に分析するための基礎的な作業を試みている。すなわち、都市地域社会における人々の結合のあり方について、従来の「アーバン ステロタイプ」を否定して、都市的な地縁関係と関係ルールの独自性を今後の研究で明らかにするため地域社会の凝集性を規定する5要因をとりあげ、それらが著者のいう4種の都市的属性によって如何なる作用を受けるかという図式作業を試み、その地域凝集効果の主體的基盤である「地域意識」の4次元(地域役割意識、地域依存意識、地域仲間意識、地域愛着意識)を提示している。簡略化していえば、高度に抽象的な分析の次元でのシステム理論を都市地域社会という具体的経験的な実態調査の場の次元へ適用するために有効な仮説理論図式が構想されているのである。

同じく本論文の主要部分と見なされる第Ⅴ部 都市地域社会調査の事例報告において、著者は前述の「地域意識」の4次元を中心に奈良市及び生駒市において実施した層化二段無作為抽出法による実態調査から得られた266項目におよぶ結果の単純集計と相関分析ならびに因子分析を通して次の如き結論に到達している。すなわち典型的に見て大都市とはいえない中・小のベッドタウン型の都市に関するかぎり、都市的な価値志向をもつ住民の間にも高い地域志向が見られ、地域意識の下位次元としての地域役割、地域依存、地域仲間、地域愛着の諸意識が地域志向因子の中心部に現われたということで、本論文において意図した著者の都市地域社会システム論に関する理論的基礎研究と実証的基礎研究の接合に向う第一歩は、方法論的にはほぼ確定したと述べられている。

論文審査の結果の要旨

アメリカのシカゴ学派に端を発する都市社会学 (E. W. Burgess, R. E. Park & R. D. McKenzie, *The City*, 1925) は、その後、わが国においても奥井復太郎(現代大都市論1940)を先達として、戦後、磯村英一、鈴木栄太郎をはじめ、近年社会学の一分野として古屋野正伍、矢崎武夫、中村八朗、倉沢進などによって主として実証的な研究が進められ、漸やく基礎的な資料が蓄積されつつある現状である。

本論文の著者は、このような都市社会学の今日に到るまでの多彩な諸業績を広く且つ丹念に検討し、さらに都市社会学以外の都市に関する代表的な社会学的諸研究 (Max Weber, É. Durkheim, F. Tönnies 等々) をもあわせて綿密に考察した結果、そこにはいまだ理論と実証をつなぐ体系的作業がなされていない点を見出して、かかる観点から先ず都市の社会学的研究を理論的基礎研究からはじめている。経験社会学又は応用社会学としての都市社会学の原点に遡って、その依って立つ社会学理論を根本的に究明し、独自の都市地域社会理論を展開している。この点、都市社会学の今後の発展に寄与する着実なる一方途を開拓した研究として本論文を評価することができるであろう。

次に著者は本論文の実証的基礎研究の部門において、今日までわが国においてなされた代表的な都市についての実証的研究をはじめ、その他関連する都市についての夥しい数にのぼる実態調査のデータを網羅的に蒐集し、分析検討し、それらの成果を批判的に取捨選択して自らの都市地域社会システム理論から実

証的研究のための作業仮説理論を演繹し、それに基づいて地方中・小都市に対する事例調査を行った。調査にあたっては周到なる統計的手法を用いて調査対象の選定、面接調査、調査結果の単純集計、クロス集計、因子分析、相関分析などを試み、作業仮説理論の検定を行っている。このような一連の実証的基礎研究は、一方においては社会学における理論と実証（特に理論の側からの実証的研究への下降）の接合について貢献し、他方においては都市社会学における実証的研究にとって必要である統計的、量的処理の先駆的業績としても評価することができる。

最後に本論文において、その足らざる点や今後の問題として著者に期待する一、二の点を述べておく。第一点は著者が自らなした事例研究における調査サンプルの母集団（各層化地点の全構成員）に対する代表性の検討が十分になされていないことである。第二点は地域意識を中心とするかかる研究には、当然のことながら、社会形態学的研究（例えば都市の新しい施設などを媒介変数とする）を以って、それが補足されることが望まれることである。第三点は実証的研究の対象を今後大都市や他の種類の諸中、小都市に及ぼし、著者の独自の都市地域社会システム理論を一般化することが望まれることである。

以上の諸点にもかかわらず、本論文のもつ都市社会学、更には現代社会学一般に対する積極的な学問的意識は十分に認められるであろう。

以上審査したところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。